混亂を生じてゐない。たゞその中に單語として外來語を取り入れて居ることは決して少くはなく、今日我々が普通本來の日本語のやうに考へて居るものも、少しく穿鑿を試みると案外外來語に歸せなければならぬものゝ多いのに驚かざるを得ない位である。諸種文化關係の言葉や動植物の名稱に於てはいふまでもないが、古代からの生活必需品の名稱。例へば「こめ」とか「きぬ」とか「かね」とかいふやうな言葉についてすら、かゝる見解を施すのが適當であるやうに思はれる。然しながらこれ等多數の外來語はみな日本語として變化せられ同化せられ、國語の語法に從つて使用せられて居るのであつて外國語としての特殊の機能を國語の中に保有してゐるのではない。即ち國語が外國語の爲めに亂されたといふやうなことはなく、遂に日本に傳へられた外國語が國語に同化されてしまつたのである。かやうにして我が國に於ては、古い時代から自由に外國語を攝取して國語の機能を助けたが、この爲に國語が破壞せられたり衰亡を見るといふことはなくして今日に至つて居るのである。

然るにこれをまた前に見たやうに東亞諸國に於ける有樣と比較して見ると、その間に著しい相違の存することが認められる。西紀ほゞ五世紀時代に、北方支那に勢力を振つた鮮卑種族の魏の國では、支那文化に心醉する餘り、その固有の言語即ち鮮卑語を用ひることを禁止してすべて漢語を用ひさせることに定めた。かくて鮮卑族の精神は言語を失つたのを先驅として衰亡し、全く漢文化に同化せられて遂にその種族の滅絕を見ることになつた。また前述女眞即ち金の如きも同樣で、漢文化の影響を受けると同時に急速な勢でこれに同化し、漸次その國語をも忘却して漢語を用ひることになつた。この有樣を憂ひて金の世宗といふ天子は女眞固有の文化の保持に力め、國語の維持についても非常に努力したのであつたがそれにも拘らず漢文化心醉の勢は滔々として防止することが出來ず、遂に